

西麻植小学校  
「学力向上実行プラン」

研究テーマ

豊かな心と確かな学力をはぐむ学習活動の創造

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員 長谷美穂	低学年部会 多田美穂(教頭)・篠原洋子(1年担任)・堀井朱乃(2年担任)・楠瀬涼(3年担任)・北村恵子(養護教諭)天満洋子[支援員]高学年部会 濱田真司(校長)・平野貴志(4年担任)・長谷美穂(5年担任)・尾崎翔大(6年担任)・後藤和世(教務主任)・瀧山千春(特別支援・特別支援教育コーディネーター)・森永達也(人権主任・研修主任)	校長 濱田 真司
-----------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------

(1)基礎的・基本的な知識・技能の習得

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ 学習に真面目に取り組み、漢字の読み書きや計算など、基礎基本の内容のおおそを身に付けている。	漢字・言葉・計算など基礎的・基本的な知識を身に付けることができる。	評価テストなどで平均正答率を80%以上にする。	引き続き、漢字テスト・計算テストを定期的に行い、自己採点・他己採点なども取り入れ、細部まで注意する習慣をつける。	漢字や計算の課題を毎日の課題にするとともに、朝の活動でドリル学習を繰り返し行うことができた。 授業のめあての明示、振り返りの実施を継続した。 ICTを使った授業を行った。	正答率はほぼ80%以上達成できた。やはり個人差があるのが課題である。 学校評価で「授業はわかりやすく楽しい」と答えた児童は、97%だった。 ICTを使った授業を週に3回以上行うことができた。
課題 個別の支援が必要な児童や、学習直後はできていてもまとめのテストなど広範囲にわたる内容になると難しい児童もいる。	①漢字や計算の課題を毎日の宿題にし、朝の活動でドリル学習を繰り返し行う。 ②「授業のめあて」の明示、「ふりかえり」の実施を継続する。 ③ICTを効果的に活用する。	①定期的に漢字や計算の確認テストを行う。 ②「授業はわかりやすく楽しい」と答える児童の割合を80%以上にする。 ③ICTを使った授業を週に3回以上行う。	「めあて」と「ふりかえり」の定着をはかる。	評価 A	次年度における改善事項 達成できていない児童に対しての個別指導を熟考する。 モジュール学習の有効な活用方法を考える。 書画カメラやデジタル教科書を使用した授業をさらに充実させる。

(2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ 自分が伝えたいことを話したり書いたりしようとする意欲は育ってきている。	読み取ったことや考えたことを、根拠や理由を明らかにして話したり、文章の構成を考えて書いたりすることができる。	①学習振り返りチェックカード「話す力」の項目で「できた」と答える児童の割合を70%以上にする。 ②学習振り返りチェックカード「書く力」の項目で「できた」と答える割合を70%以上にする。	引き続き、話し合いの手引きやホワイトボードを活用した授業を行う。	話し合いの手引きやホワイトボードを使用して、理由を明らかにした話し合い活動を行うことができた。 他学年に向けて、話す場を作った。また、「〇年生に読んでもらおう」と具体的な目標を示し、他学年が読む場を作った。	学習振り返りチェックカード「話す力」の項目は86%だった。 学習振り返りチェックカード「書く力」の項目は91%だった。 話し合いを用いて、グループ学習やペア学習での話し合い活動を月に2回以上行うことができた。
課題 既習の知識を活かした応用力には、個人差が大きく、二極化がみられる。相手によくわかるように話したり、説明したりする力、構成や段落を考えて書く力にも個人差がみられる。	①全ての教科において、話し合いの手引きやホワイトボードを活用した授業を計画的に位置付ける。 ②目的意識や相手意識を持たせて、話したり書いたりする場を作る。	①話し合いの手引きやホワイトボードを活用した授業を月に2回以上行う。 ②目的意識や相手意識をもって表現する授業を月に2回以上行う。	目的意識や相手意識をもたせて表現する授業を各教科において、計画的に行う。	評価 B	次年度における改善事項 話し合いの手引きを、さらによりよいものにするよう熟考する。 目的意識や相手意識をもたせて表現する場を国語科以外の他教科でも計画的に行えるよう、年間指導計画を見直す。 理由や根拠を文章から読み取ることができる力を育てる。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ 与えられた課題は真面目に取り組むことができる。 自主勉強ノートを宿題として出した場合、自分でめあてを考えて取り組むことができる児童もいる。	「もっと知りたい、調べたい」という課題意識をもって学習に取り組むことができる。	学習ふりかえりチェックカードの「もっと知りたい・調べたい」と答える割合を70%以上にする。	ふりかえりを確認し、児童が「もっと知りたい」と書いている学習内容については、次の時間にふれるようにする。 引き続き、自主勉強ノートのよい例を広める。	教材研究を行い、児童が主体的に学ぶことができる授業を行うことにより、進んで学ぼうとする意欲をもたせることができた。 自主学習ノートの良い例を、朝会で紹介したり、ろうかに掲示したりした。また、学級内でも紹介し合った。	学習振り返りチェックカードの「もっと知りたい・調べたい」と答えた児童の割合は、92%であった。 月に1回、朝会で紹介した。また、掲示も月に1度交換した。
課題 与えられた宿題はできているが、自発的に行う予習復習や、家庭読書に進んで取り組む児童は少ない。「もっと知りたい、調べたい」という意欲をもって、進んで取り組む児童が少ない。	①教材研究を行い、児童が主体的に学ぶことができる授業を行う。 ②自主学習ノートのよい例を児童と保護者に示していくことで、家庭学習の質を高める。 ③自主勉強を掲示したり、朝会で紹介したりする。	①「進んで学ぼうとすることができた」と答える割合を70%以上にする。 ②学期に2回程度、自主学習ノートのよい例を配付する。 ③月に1回朝会で紹介したり、廊下に掲示したりする。		評価 B	次年度における改善事項 自主学習ノートにおけるめあてと振り返りの記述に個人差があった。振り返りの観点例を示すことで、全員が記入できるようにしたい。特に、振り返りが次の自主学習ノートのめあてにつながるよう、指導する。 学期に2回程度、自主学習ノートの良い例を学年だよりのコーナーの中に入れて、配付することが全学年で徹底できなかった。自主学習ノートの良い例をデータ化することはできたが、効果的な活用をさらに熟考する。 「もっと知りたい・学びたい」という意識を取り入れて授業を行うよう、さらに改善する。

平成31年度 学力向上ロードマップ

